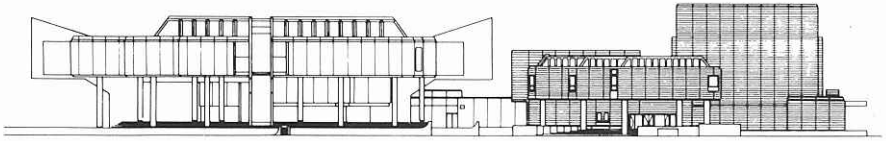
岡田三郎助愛用のパレット

佐賀県立博物館・美術館報

SAGA PREFECTURAL MUSEUM・SAGA PREFECTURAL ART MUSEUM

1 October 1993

No. 103



展覧会案内　補説

岡田三郎助の展覧会歴

岡田三郎助の一文に「個展雑感」(『塔影』11-8 1935年8月)がある。そのなかで岡田は、自由な独立した発表形式として、個展を理想に近いものと考えている。すなわち、藝術の使命は「個人的鑑賞」にもとづくものであり、団体展においては、「社会的な鑑賞」を本位とした作品が勃興しつつある、と主張している。「社会的な鑑賞を本位とする」とは、制作を殊更に大きくしたり、色彩を強烈にするといったことである。

以下では、岡田に関する展覧会を列記した。美術館開館10周年を記念して「岡田三郎助展」を開催するにあたって、これまでに開催された展覧会の足跡をふりかえってみる。

@　「岡田三郎助氏小品展覧会」
主催　青樹社画堂（日本橋通二丁目五番地）
会場　銀座三共ギャラリー
会期　1929年（昭和４）６月22日～同月27日
内容　絵画作品（すべて油彩画か）28点。

@　「岡田画伯外遊記念小品画展覧会」
主催　高島屋美術部
会場　日本橋高島屋
会期　1931年（昭和６）９月
内容　岩絵具の作品（油彩画は２点か）を中心に20点。額縁に古裂を使用する。

@　「岡田三郎助氏蒐集美術工藝品展覧会」
会場　共楽美術倶楽部（京橋）
会期　1931年（昭和６）１月24日午後１時～夕刻
内容　1930年の渡欧で蒐集した裂地をはじめ硝子器、小刀、マルバル紙等千余点。

@　「岡田三郎助遺作展覧会」
主催　（準備委員）中村研一、太田三郎、大隅為三、辻永
会場　東京府美術館
会期　1940年（昭和15）２月14日～同月20日
内容　油彩、岩絵具作品445点。素描、水墨画、エッチング等約80点。レリーフ、工藝品等約40点。

@　「岡田三郎助遺作展覧会」
会場　大阪市天王寺美術館
会期　1940年（昭和15）３月１日～同月５日
内容　東京府美術館での遺作展のうち関西方面の出品を主とし、これに岡田家所蔵の一部を加え百余点。

@　「岡田三郎助先生蒐集工藝品展覧会」
主催　高島屋美術部
会場　日本橋高島屋
会期　1940年（昭和15）５月14日～同月18日
内容　木工、金工、染織その他の生前の蒐集になる工藝品千余点。

@　「岡田三郎助展」
会場　光風会館
会期　1953年（昭和28）11月９日～同月14日

@　「岡田三郎助遺作小品展」
会場　中央公論社画廊
会期　1954年（昭和29）４月12日～17日

@　「岡田三郎助名作展覧会」
主催　朝日新聞社
会場　日本橋高島屋
会期　1963年（昭和38）９月17日～同月22日
内容　出品目録は62点を掲載する。ただし展覧会に展示されなかった作品も含まれる。

@　「裸像にみる黒田清輝・岡田三郎助の芸術展」
会場　伊勢丹
会期　1967年（昭和42）４月15日～同月22日

@　「岡田三郎助展」
主催　読売新聞大阪本社
会場　大丸・大阪店本館
会期　1972（昭和47）８月31日～９月５日
内容　出品目録に46点を掲載する。

@　「岡田三郎助油彩展」
会場　銀座・松屋
会期　1973（昭和48）１月19日～同月24日

@　「百武・久米・岡田三人展」
主催　佐賀県立博物館
会場　佐賀県立博物館
会期　1974年（昭和49）９月21日～10月23日

内容　素描10点、下絵２点を含め53点。
@　「岡田三郎助展」
主催　読売新聞大阪本社、梅田近代美術館
会場　梅田近代美術館
会期　1977年（昭和52）４月５日～同月24日
内容　油彩画等56点、素描等９点。
@　「岡田三郎助展」
東京展
主催　岡田三郎助展実行委員会、財団法人笠間日動美術館
会場　日動サロン
会期　1977年（昭和52）９月17日～10月２日
名古屋展
主催　中日新聞社、岡田三郎助展実行委員会、財団法人笠間日動美術館
会場　名古屋日動画廊
会期　1977年（昭和52）10月５日～同月16日
内容　油彩画を中心に65点。
@　「岡田三郎助画伯遺愛染織品展」
主催　財団法人遠山記念館
会場　財団法人遠山記念館
会期　1977年（昭和52）10月８日～11月３日
@　「岡田三郎助展」
主催　岡田三郎助展実行委員会、佐賀県立博物館、佐賀新聞社
会場　佐賀県立博物館
会期　1979年（昭和54）７月７日～同月29日
内容　油彩・岩絵具作品90点。下絵、素描43点。その他参考資料21点。
@　「藤島武二・岡田三郎助展」
主催　西宮市大谷記念美術館、サンケイ新聞社、阪神サンケイ新聞社
会場　西宮市大谷記念美術館
会期　1980年（昭和55）11月１日～同月30日
内容　油彩・岩絵具作品56点。下絵、素描15点。
@　「日本近代洋画の栄華－岡田三郎助－」展
主催　佐賀県立美術館
会場　佐賀県立美術館
会期　1993年（平成５）10月８日～11月14日
内容　油彩・岩絵具・パステル作品127点。下絵・素描・墨画38点。その他資料15点。

（企画普及係長　松本誠一）

常設展案内

佐賀県立博物館　名品撰

会期：９月23日㈮～11月23日㈫【但し、３号展示室は10/2㈯より】

この度の「名品撰」は、佐賀県立美術館10周年記念展「岡田三郎助展」〔10/８－11/14〕の会期に併せたもので、開館以来博物館が、所蔵・寄託・保管によって収蔵する資料の中から約百五十件を選び展示します。

主な展示資料、県内唯一の国宝で古代歌謡のひとつ催馬楽の平安時代後期の優れた写本である催馬楽譜（１冊、寄託／鍋島報效会蔵）はじめ、唐津市桜馬場遺跡出土品一括、北茂安町検見谷遺跡出土中広形銅矛（12口、保管／文化庁蔵）、平安時代後期の東遊歌神楽歌（１巻、寄託／鍋島報效会蔵）、鎌倉時代末の代表的な肖像彫刻円鑑禅師坐像（１躯、寄託／高城寺蔵）、鎌倉時代末の真言律宗寺院の様子を描く三田川町の東妙寺並妙法寺境内図（１幅、寄託／東妙寺蔵）、円相像としては最古例の中国元時代末の高僧の肖像画である見心来復像（１幅、寄託／萬歳寺蔵）、高麗王妃の発願で宮廷画院の画師８人によって描かれた竪４メートルを越える巨大にして美麗な楊柳観音像（１幅、寄託／鏡神社）などの重要文化財を含む資料です。

楊柳観音像　寄託／鏡神社蔵

資料紹介

鍛金作家 石田英一（いしだえいいち） 作品と時代 —その2—

この文は、平成4年度に石田家より美術館に譲渡された石田英一の遺作類や印章類、賞状や辞令書をふくむ貴重な資料をもとに、『館報99号』の続編としてまとめている。

金工家石田英一（1876～1960）については、簡単な略歴をのべておきたい。

東京に生まれ、東京美術学校の鍛金科を卒業（1900）、金工科助手（1905）、助教授（1907）をへて大正14年（1925）教授となり、昭和2年に渡仏留学(1927～29)。美術工芸の認識を芸術に高めようと尽力した画家岡田三郎助（1869～1939）に賛同、元佐賀藩士族同志は昭和2年第8回帝展第4部（工芸部門）の設立を実現して、帝展・文展から日展にいたる工芸活動の推進力となる。金工、とくに鍛金についての技術的な指導とともに作家として近代的な創作価値をみいだす努力を続けてきた。

前章では、履歴書に書かれたルビ「イシダヒデイチ」から「イシダエイイチ」への変遷をきっかけに、銘による作品の時代を推定して、明治末期から大正、昭和10年頃までを「英一」銘の時代、「素暎」銘は昭和10年前後から20年代の新文展、日展の時代、「暎遣知」銘は昭和の初め頃、過渡期に使われたのではないかと考えたこと、寄贈資料の中に1925年（大正14）パリ万国装飾美術工芸博覧会に出品された「鎚起皺燭台」（箱書「三宝燭台」）」そのものを発見したことを紹介した。(1)

ここではまず、教授となり、フランス留学（1927～29）を終えた英一が、大阪工芸協会の依頼により講演した「現代佛蘭西工藝の状況及國際美術展出品評」(2)から、創作的な美術工芸と産業の振興の現状に対する意見を抄録してみよう。

パリの「日本美術展覧会」(3)は、東洋趣味に注目するフランスの観客を動員して好評というが、日本画の評価は花鳥、動物などに集まり、理解(あるいは想像）のおよばない肖像画や墨絵はほとんど無視されているという。工芸品のうち、陶磁器は食器類がフランスでの用途にあわないこと、花瓶も室内装飾用には「七、八寸位が手頃」で、「一尺以上」は不向き、博覧会向けの大作はあくまで会場の演出効果用ということらしい。色彩は、アール・デコの時代らしく「黒と白と赤と云う様な数色のものが非常に流行して」、単色より2色以上をあわせた配色の明快なもの、「その色取りは妙なもの」（英一評）が歓迎されているとか。確かな技術に加えて上絵の多彩なフランスでは、模様と色で日本的な趣を出した陶磁器は顔色なし、古典的な呉須の藍や九谷焼の繊細な上絵赤の線描がかえって注目されるだろうとみている。

フランスにはなかった蒔絵は、フランス人の図案家と領土内の中国人職人の共同製作で室内装飾などに広く応用されて盛んだが、日本でこうした装飾工芸にたずさわる人がきわめて少ないといい、出展された蒔絵の装飾に、日本では時代遅れの線描の細密画があればよかったろうといっている。日本の金工は精巧な着色に繊細な象嵌がすぎて、金属の表に模様を描いた蒔絵のような印象をもたれていること、金属の器はふつう食卓用で装飾用は美術品扱いであること、鍍金をきらい金色の地に彩色（「塗絵」）を巧みに施す技術が発達していると評している。「打物（うちもの：鍛造）」は刀剣の刀身に「空（余白）」の表現をみて、鞘（さや）や鍔（つば）の装飾的な部分とのコントラストに美をみいだすフランス人識者の鋭い感覚があるため、全面をうめ尽くす装飾過剰の工芸品には批判的であるという。

とくに、日本的なデザインを日本の素材で出品することをすすめて、オランダ風やインド風、支那風、ペルシア風は日本より近い本国から入手できると手厳しく、どんな（異国の）模様でも消化してしまうフランスでは、たとえば友禅縮緬や日本の手拭縞（てぬぐいじま）がかえって日本らし

く評判をよぶだろうとして、さらに前述の「用途にかなうこと」を、今後の産業工芸発展の鍵と再度強調している。

二年あまりの滞仏中の日課は、博物館や工場、学校や商店の見学がおもな仕事で、実技研修はしていないとことわり、フランスは工芸品などの新しいものを歓迎し、旧来のルイ王朝様式以上の美術品の創造にかけているといい、実技教育は家政学校（鍛治・木工）とその上の徒弟学校（木工・鍛工・板金細工・鉛管細工・鋳物の仕上）があり、卒業後はそのまま職人の卵として働くことのできる制度が確立していることを述べている。さらに上級の美術学校（専門学校）へは、成績のよしあしに加えて指導教師による適性判断の証明がなければ進学できないこと、塑像・木彫・絵画などの純美術学校では、厳密に解剖学的なデッサンを学び、全員が与えられたテーマにしたがって製作に励むが、卒業後は個性を発揮した新しい方向をめざす。こうした時代の中から「象形美術（抽象美術）」や未来派が誕生して、新しい「考え（コンセプト）」や新しい「技術の筋（テクニック）」で既成の芸術の価値観に挑戦していることに感銘を受けたことを語っている。

パリ市内の博物館22館は、日本のように「万物を集めた」博物館ではないが、機械館、歴史館、東洋館と専門化して充実した内容を誇っているから、大阪府の博物館（貿易館）に期待したいと、大阪での講演を終わっている。

寄贈資料から二つ目の新発見は、「素暎」銘時代も晩年の第５回日展出品作「金工鎚起仏　迦陵頻伽（かりょうびんが）」(1949) ⑷である。出品委嘱者石田素暎はこの時73歳、前述の講演から20年の歳月がたち、翌年の第６回展出品を最後に日展第４部を勇退しているから、作品としても最晩年の力作の一つといえる。

真鍮（黄銅）の板から人頭・鳥身、その妙なる鳴声は仏の声音のように響くという雪山や極楽に住む想像上の鳥、迦陵頻伽を形作って、木製の枠で衝立のように構成しており、裏面左下に刻んだ

「鍛金仏　迦陵頻伽」（黄銅）

「昭和二十四年秋／石田素暎作」銘は、たんに「素暎作」と記される作品よりは作家の創作意欲を刺激し、完成した時の喜びもひとしおだったろうと想像したくなる。実際、真鍮は金属を伸縮させる鍛金にはワレがでやすくむずかしいというが、金属面（33.8×26.9㎝）を打ちだして突出した顔面までの厚さは5.1㎝、印を結ぶ左手も衣から伸ばされている。表は中空に浮かぶ鳥人の姿が古典的な趣で端正に表現され、裏は工芸家の技術の粋と情熱を吸いこんで静謐（せいひつ）の中にまどろんでいるといえばいいだろうか。「素暎」時代の作品は、鎚（つち）打ちをいかした柔和な曲線で全体像をとらえたものが多く、単純化された線の現代的、造形的なものが多かったようだが、主題を仏教にとり古典的な意匠を製作した本作は、ご子息の尚豊氏との美術館巡りで目にした中国の金工品に挑戦して創作されたということだ。

戦時特別展（1944）出品の「天の岩戸開き額面」も、金属面に鍛造の作品とおもわれるが、未見。

以上が、新発見資料にもとづく鍛金作家石田英一再考である。今後機会があれば、工芸活動それぞれの作品と資料をたどって、時代と作品の動向を探ってみたいと思う。　（学芸員　宮原香苗）

⑴彫銘「大正十四年正月／石田英一作」。
⑵雑誌『大阪之工芸』第６巻第57号、1930（昭和５）・３月号　東京文化財研究所
⑶1929年６月開幕した『日本美術展覧会』（会場グラン・パレー）。帰国直前のため、展示指導に立会ったのみで、批評や感想は後日滞仏二十数年の木彫家稲垣某氏による報告をもとにしている。
⑷『日展史』第16巻　日展史編纂委員会編　社団法人日展、1987

博物館講演会要旨

初めて海を渡った佐賀人たち

講師　九州大学大学院博士課程　　アンドリュー・コビング氏(英国人)

幕末維新期の海外旅行熱

西洋文明との出会いを特色とする江戸末期には、数多くの日本人が海外へ旅立った。「国禁法」により、海外渡航はまだ禁じられていた時代でもあったが、外交交渉やいわゆる「新知識」を求めた江戸幕府は使節団や留学生団の派遣に着手し始め、また、幕府の許可を得ずして西南雄藩からイギリスへ渡航する密航者も現れた。

国禁が廃止された慶応２（１８６６）年から外国へ行く日本人が次第に増え、特にその翌年のパリ万国博覧会は旅行者たちの注目を集めた。その傾向は明治維新期の日本国内の混乱のため一時的に途切れたが、内乱の終結により欧米への留学生は急増した。

佐賀藩の洋行者たち

こうした動きの中で、佐賀藩から海を渡った人々の姿が目立っている。佐賀藩は、幕府の欧米使節団に他藩より多くの随行員を参加させ、さらに維新期にはいるとどの藩よりも多くの留学生を西洋へ派遣した。

幕末期を含めて考えてみると、薩摩藩だけが佐賀藩より多くの留学生を海外に送り出しているものの、佐賀藩において西洋の知識に対する関心が非常に高かったのは明らかである。

その要因として、明治維新までに海外へ旅立った佐賀藩出身者の半数が、１８５０年代に幕府がおこなった長崎海軍伝習の経験者であった事は注目すべきであろう。

佐賀藩の技術方針と長崎海軍伝習所

長崎警備の責任を担っていた佐賀藩は、幕末期の外圧を契機に当時の日本製武器の無力さを思い知らされた文化５（１８０８）年のフェートン号事件以来、長崎在住のオランダ人から情報を得ながら大砲技術の研究に力を入れた。嘉永３（１８５０）年には日本で初めての反射炉を築き、その翌年、大砲の鋳造に成功した佐賀藩は、佐野常民の尽力により、数多くの業績を誇った「精煉方」という化学研究所も設立、安政２（１８５５）年の長崎海軍伝習所設立を機会にさらに近代海軍へと目を向けていった。

佐賀藩が、安政５（１８５８）年にオランダから購入した軍艦電流丸の操縦を可能とし、航海技術力を養う必要性を感じたことも重要なことと思われるが、長崎海軍伝習に佐賀藩は上官から下官に至るまで他の藩より遙かに多くの伝習生を参加させ、多大な成果を挙げたことは高く評価される。海外へ派遣する人材を選ぶ際、藩で最も優秀な洋学生といえるそれらの技師たちが優先されたのは当然のことであった。

１８６０年幕府遣米使節

万延元（１８６０）年に数か月間アメリカ各地を巡った幕府使節の中に、長崎海軍伝習生の５名を含む８名が佐賀から参加していた。しかし、当地の施設を視察する機会はあったものの、短期間の旅であったことと語学力不足によるものであったのか、具体的な技術導入には繋がらなかったようである。

ただ、随行員の１人であった小出千之助が語学能力を発揮し、帰朝後、藩に上申した報告は高く評価された。その中には、１９世紀半ばにおいて世界で重要な位置にあったアメリカやイギリス、また、その植民地で通用する言葉が英語であったので、従来の洋学を占めた蘭学を英学に転換する必要性が唱えられていた。

佐賀藩の英学伝習の事始め

佐賀藩の英学伝習は、長崎開港にともなって来日した英米商人たちの影響もあり、幕府遣米使節派遣と同じ万延元（１８６０）年に、長崎海軍伝習所で機関術を専門としていた佐賀藩士石丸虎五郎が長崎に遊学した事に始まった。

その後、小出の報告により、文久元(１８６１)年から英学伝習に他の藩士も加えられることとなった。のちに佐賀藩に重要な影響を与えたグラバーのようなイギリス商人や、フルベッキのようなアメリカ人教師を藩に紹介したのはこれらの英学伝習生たちであった。

文久２（１８６２）年になると、佐賀藩は伝習生の１人であった藩士中牟田倉之助を、藩士納富介次郎と商人２人とともに幕府の上海事情調査団に参加させた。さらに同年、精煉方の技師石黒寛二と砲術専門家の岡鹿之助は、遣米使節にも随行した医師川崎道民とともに幕府の遣欧使節に参加した。

留学と密航

慶応元（１８６５）年、その当時薩長留学生の密航を斡旋していた長崎のイギリス商人グラバーは、佐賀藩の英学伝習生石丸虎五郎を母国スコットランドの東北に位置する出身地のアバディーン市へ招待した。佐賀藩は政治的に薩長より幕府に近い関係にあったため、石丸と同志の馬渡八郎は脱藩の形で長崎から密航し、藩主鍋島直正は以前よりその計画を知っていたものの、知らないものとして対応した。

彼ら２人と同行した安芸藩士野村文夫が書いた日記「乗槎日録」により、４ケ月の長い航海に耐え、和服から洋服に着替え、断髪を決し、英語・数学・地理を現地の家庭教師より学んだことなど、佐賀藩からの唯一の密航者であるこの２人のイギリス留学の様子が窺える。彼らは明治元（１８６８）年に帰朝し、長期留学の成果としてのちに政府の上級官吏の地位に就いた。

佐賀藩遣欧佐野一向

江戸幕府は慶応３（１８６７）年にパリで開催された万国博覧会の参加を全国の藩に募ったが、団体を派遣したのは佐賀藩と薩摩藩だけであった。

佐賀藩にとっても初めての海外使節団となり、佐野常民を始めとする５名がヨーロッパへ旅立った。しかし、パリに到着した夜、無念にもその中の１人であった商人野中元右衛門が当市のホテルで客死した。

万博開催中、佐野は有田焼等の販売を商人深川長右衛門と通訳小出千之助に任せてオランダに赴き、佐賀藩軍艦日進丸購入の交渉に没頭した。明治元（１８６８）年になり、フランス・オランダ・イギリスで軍事施設や福祉施設を視察の途中、佐野一行は明治維新の情報を知るや急遽帰朝した。

維新期における佐賀の留学生の急増

佐賀藩が維新期に欧米へ大規模な留学生団を派遣したのは、のちに佐賀の乱で処刑された江藤新平の影響によるものと思われる。それらの留学生たちは長崎海軍伝習生の次世代にあたったが、彼らの派遣は佐賀藩の海外知識に対する関心の高さが幕末期から維新期にかけて持続したことを強く証明する事実である。

最後の佐賀藩主となる鍋島直大も、明治４（１８７１)年には海外へ旅立ち、のちにオックスフォード大学に入学することとなった。

時を同じくして岩倉使節の紀行録『米欧回覧実記』を書いたのは、随行した佐賀藩出身の久米邦武であった。

その後も、明治６（１８７３）年ウィーン万国博覧会に参加した日本団の総裁大隈重信や副総裁佐野常民、明治１３（１８８０）年にスコットランドに留学した科学者志田林三郎、久米邦武の長男でのちにパリで美術を学んだ画家久米桂一郎等のように、佐賀の出身者たちは海外へも目を向ける肥前の長い伝統を受け継いだ。

以上は、去る平成５年７月25日(日)佐賀県立美術館画廊・研修室で行われた佐賀県立博物館特別講演会「初めて海を渡った佐賀人たち」に先立って講師のアンドリュー・コビング氏より提出していただいた講演要旨を掲載させていただきました。

（文責　学芸員　川副義敦）

行事案内

10月 ⇨ 12月

10月	日	月	火	水	木	金	土
						1	2
	3	4	5	6	7	8	9
	10	11	12	13	14	15	16
	17	18	19	20	21	22	23
	24/31	25	26	27	28	29	30

11月	日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5	6
	7	8	9	10	11	12	13
	14	15	16	17	18	19	20
	21	22	23	24	25	26	27
	28	29	30				

12月	日	月	火	水	木	金	土
						1	2	3	4
	5	6	7	8	9	10	11
	12	13	14	15	16	17	18
	19	20	21	22	23	24	25
	26	27	28	29	30	31	

カレンダー内、□印は休館日

常設展　観覧料　大人200(150)　大学150(100)　※高校生以下は無料、(　)内20名以上団体

博物館

- 1号展：9/23　自然　留鳥と渡り鳥ほか　11/23
- 2号展：9/23　名品撰　佐賀県立博物館　11/23
- 3号展：準備　10/2　11/23
- 大展：10/2　民俗　竹の民俗ほか　11/23

準備

北京故宮博物院展
12/1(木)～12/26(日)　佐賀新聞社
大人 1,000(900)　大・高生 700(600)
中・小生 400(300)
※(　)内は前売・団体料金

12/1　民俗　竹の民俗ほか　12/26

12/27～　休　館

美術館

- 1号AB展：準備　11/19～12/23　古賀忠雄ーテッサンとカルー
- 2号展：11/19　ベルナール・ビュッフェ　銅版画　12/23
- 3号展：準備
- 4号展：12/24～　休　館

第5回　佐賀県高等学校総合文化祭書道展
9/28(火)～10/3(日)　県高等学校文化連盟

日本近代洋画の栄華
岡田三郎助展
10/8(金)～11/14(日)　佐賀県立美術館
大人510(410)　大学生250(150)　※高校生以下および心身障害者は無料

展覧会　枠内に明記する以外は無料

- 第13回　日韓文化交流展　11/18(木)～11/21(日)　佐賀新聞社
- 第7回　蕾松会展　11/23(火)～11/28(日)　蕾松会
- 第34回　佐賀県学童美術展　11/30(火)～12/5(日)　佐賀県造形教育研究会
- 第34回　佐賀大学教育学部美術・工芸科総合展　12/7(火)～12/12(日)　佐賀大学教育学部
- 第14回　佐賀新聞学生書道展　12/14(火)～12/19(日)　佐賀新聞社

12/20～　休　室

12/28～1/4　年末・年始休館

日誌

平成５年度　博物館学実習

将来、博物館・美術館の学芸員として活躍しようとする学生を対象に、今年も博物館・美術館実習を実施しました。実習生は、博物館・美術館の概要をはじめ、自然科学・歴史・美術・工芸など、各分野にわたって大変熱心に学習と活動をおこないました。

日　　程　　6月30日(水)～7月9日(金)
実習生数　　17名
佐賀大学(7名)　西南学院大学(3名)
中央大学(1名)　京都橘女子大学(1名)
駒沢大学(1名)　鹿児島女子大学(1名)
純心女子短大(1名)　梅光女学院大学(1名)
広島文教女子大学(1名)

平成５年度　美術館実技講座「石膏デッサン教室」

日　　程　7月19日(月)～7月23日(金)　午後2時～4時
講　　師　九州女子短期大学教授　深川善次先生
募集人員　30名（一般成人を対象）・無料

美術活動に対する意識の向上を目的として、今年も上記の要項で美術館画廊・研修室で実施し、25名（5名欠席）の参加者がありました。

佐賀県立博物館・美術館報　第103号　平成５年10月１日
編集発行　佐賀県立博物館・佐賀県立美術館
〒840　佐賀市城内1-15-23　TEL0952・24・3947　FAX0952・25・7006
印　　刷　日之出印刷株式会社